

本邦における重症熱性血小板減少症候群の疫学・臨床的特徴の検討

著者	加藤 博史
号	87
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	医博第3734号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00124136

氏名	かとう ひろふみ 加藤 博史
学位の種類	博士 (医学)
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 27 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項
研究科専攻	東北大学大学院医学系研究科 (博士課程) 医科学 専攻
学位論文題目	本邦における重症熱性血小板減少症候群の疫学・臨床的特徴の検討
論文審査委員	主査 客員教授 大石 和徳 教授 賀来 満夫 教授 児玉 栄一

論文内容要旨

重症熱性血小板減少症候群 (Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome: SFTS) は SFTS ウイルス (SFTSV) によって引き起こされるマダニ媒介性感染症で、ブニヤウイルス科プレボウイルス属に分類される新興感染症である。2009 年、中国から初めて報告され、2013 年、本邦において初めての SFTS の症例が報告された。SFTS は報告されてから間もないこともあり、わが国における SFTS の疫学・臨床的特徴について十分調査がなされていない。SFTS の疫学・臨床的特徴を明らかにするために本研究を実施した。

本研究は後ろ向き観察研究である。まず、2013 年 4 月から 2014 年 9 月までに感染症発生動向調査に報告された SFTS 症例の基本属性を分析した。さらに、この SFTS 症例を報告した臨床医に対して質問用紙を郵送し、感染症発生動向調査では得られない詳細な疫学・臨床的情報を収集、分析した。なお、SFTS 症例は全て、国立感染症研究所または地方衛生研究所において実施された実験室的方法 (逆転写ポリメラーゼ連鎖反応: RT-PCR) によって診断された。

2013 年 4 月から 2014 年 9 月までに 96 例の SFTS 症例が感染症発生動向調査に報告された。全ての症例は西日本から報告されており、82 例 (85%) は 4 月から 8 月までに発症していた。96 例中 49 例で質問用紙を回収することができ (回収率: 51%)、そのうち 15 例が死亡していた (致命率: 31%)。症例の特徴として、高齢者が多く (年齢中央値: 78 歳)、41 例 (84%) が 60 歳以上であった。41 例 (84%) が発症 2 週間前に屋外での活動歴を有していた。検査所見では、入院時の血液中 CRP 値が軽度上昇しており、侵襲性アスペルギルス症を含む真菌感染症が 5 例 (10%) の症例でみられた。骨髓穿刺が実施された 18 例中 15 例 (83%) で病理学的に血球貪食を認めた。死亡のリスクを検討するために、生存群と死亡群の所見を統計学的に比較したところ、入院中の神経学的異常や血清 LDH と血清 AST の上昇が死亡群で有意に多かった。

SFTS 症例の多くは 4 月から 8 月に報告されるという季節性を認め、西日本に偏った地理分布を示した。症例の 41 例 (84%) が 60 歳以上であり、41 例 (84%) が発症 2 週間前の屋外活動歴を有していた。従って、流行域の住人、特に高齢者は屋外活動の際にダニに刺されないような予防策が必要であると考えられる。また、入院中の神経学的異常や血液検査異常は、臨床医にとって SFTS の予後を予測する因子として有用である可能性が示唆された。

審 査 結 果 の 要 旨

博士論文題目本邦における重症血小板減少症候群の疫学・臨床的特徴の検討.....

所属専攻・分野名医科学専攻.....・感染症疫学分野.....

学籍番号.....B4MD5040.....氏名.....加藤博史.....

重症熱性血小板減少症候群は SFTS ウイルス（SFTSV）によって引き起こされるマダニ媒介性の新興感染症である。2009 年に中国から初めて報告され、2013 年には本邦において初めての SFTS の症例が報告された。本研究の目的は、わが国の SFTS の疫学・臨床的特徴を明らかにすることである。

2013 年 4 月から 2014 年 9 月までに感染症発生動向調査に報告された SFTS 症例の基本属性を分析した。さらに、症例を報告した臨床医に対して質問用紙を郵送し、詳細な疫学・臨床的情報を収集・分析した。全ての症例は国立感染症研究所または地方衛生研究所において RT-PCR 法によって診断された。

2013 年 4 月から 2014 年 9 月までに 96 例の SFTS 症例が感染症発生動向調査に報告された。全ての症例は西日本から報告されており、82 例（85%）は 4 月から 8 月までに発症していた。96 例中 49 例で質問用紙を回収することができ、そのうち 15 例が死亡していた（致死率:31%）。症例の特徴として、年齢中央値 78 歳であった。41 例（84%）が発症 2 週間前に屋外での活動歴を有していた。骨髓穿刺が実施された 18 例中 15 例（83%）で病理学的に血球貪食像を認めた。生存群と死亡群の所見を統計学的に比較したところ、入院中の神経学的異常や血清 LDH と血清 AST の上昇が死亡群で有意に多かった。

要約すると、SFTS の発症は 4 月から 8 月に季節性を認め、西日本に偏った地理的分布を示した。症例の 41 例（84%）が 60 歳以上であり、41 例（84%）が発症 2 週間前の屋外活動歴を有していた。流行地域居住者は屋外活動の際にダニに刺されないような予防策が必要であると考えられる。また、入院中の神経学的異常や血液検査異常は、臨床医にとって SFTS の予後を予測する因子として有用である可能性が示唆された。

本論文によって、わが国における新興感染症である SFTS の臨床・疫学像が初めて明らかにされた。よって、本論文は博士（医学）の学位論文として合格と認める。